

檀一雄「樹々に匂う魚」「裾野少女」論 ——「故郷」の表象をめぐる——

申 福 貞

はじめに

檀一雄の第一創作集『花筐』は、佐藤春夫の装幀で1937年7月赤塚書房より刊行された。その出版記念会の予定日に檀は、日中戦争の最初の動員令を受け、久留米独立山砲兵第三聯隊に入隊するが、その時すでに書いていた「樹々に匂う魚」は、同年9月に『早稲田文学』に発表され、1941年5月には満洲浪曼叢書・春季作品集『僻土残歌』に再録されている。

1936年に東京帝国大学を卒業した檀は、母トミの勧めもあって、満鉄の就職依頼という口実で8月末に「満洲」に渡るが、就職先の満鉄には行かず坪井與を頼って大連、奉天、新京、ハルビン等を転々とし、そのまま秋には日本に戻る。「樹々に匂う魚」は、檀が初めて満洲に渡って帰ってきたその翌年に書かれた作品である。1940年、召集が解除されると再召集を恐れ、二度目に「満洲」に渡った檀は、1941年10月に帰国し、12月には高橋律子と見合いをする。その後、再び「満洲」に渡るが、翌年春に帰国し、5月に高橋律子と結婚してからしばらく国内に留まる。檀一雄が二度目に満洲に渡ってから敗戦まで発表された作品はそれほど多くないが、檀は「内地」と「外地」に目を向けながら文学活動を続けていた。「満洲」を背景にした「魔笛」(『芸文』1942・月不詳)、義弟和雄と朝鮮への旅を題材とした「冬の瓦」(1942.10・誌名不詳)と「吉野の花」(『文芸日本』1942.11)は、いずれも「私」の旅(〈放浪〉)と関わるものである。結婚後、三度目に「満洲」に渡り帰ってきた檀は、1943年8月『文芸世紀』に「樹々に匂う魚」の続編として「裾野少女」を発表する。このような流れを考えた時、「樹々に匂う魚」と「裾野少女」を論ずる際に檀一雄の「満洲」での経歴は欠かせないものであろう。

〈生まれたときから故郷を喪失〉したと、自分の幼年時代の家庭環境と「故郷喪失」について語る檀一雄のこの言葉は、「満洲」経歴を含む檀の〈放浪〉生活と結び付けられ、しばしば論じられてきた。荻久保泰幸は、檀の家庭環境と檀自ら語った「故郷喪失」について触れながら、このような「故郷喪失」は同時代人に共通するものと指摘し、次のように述べている¹⁾。

第一次世界大戦の戦後、洋の東西を問わず、知識人たちはマルチン・ハイデガーのいう〈ハイマート・ロス〉(故郷喪失)の状況を生きざるを得なくなっている。したがって、〈ふるさとは遠きにありて思ふもの〉であり、〈汝に家郷は有らざるべし〉であり、小林秀雄ふうにいえば〈故郷を失った文学〉ということである。〈故郷喪失〉をいかに回復するか、それが無頼派といわれる文学者たちの重要なテーマとなる。

指摘されたように檀の「故郷喪失」は同時代人に共通するものでもあるが、作品の中に提示されている「故郷」の表象は、同時代の「故郷回帰」と異質なものではないかと思われる。「樹々に匂う魚」の冒頭にはヒロインあきの出自とともに富士についての記述がみられ、富士はあきの成長の物語を伴って数か所あらわれている。富士についての記述は、「樹々に匂う魚」の続編として発表された「裾野少女」にも見られる。本論では檀の「満洲」経験を視野に入れながら、「樹々に匂う魚」と「裾野少女」を中心に、富士の表象と「故郷」の問題を、個人的な生活空間を超え、その時代の言説空間の中で考察する。

1. 〈生き続ける〉父

水沢あきは豚の売買を職業とする父市五郎と母ゑんの間で生まれた。物語の冒頭に富士が見えるあきの「故郷」と〈非人の職業〉をもつ家庭で私生児として生まれたことが紹介され、あきの来歴が明らかになる。

父の市五郎は豚の売買を営んだ。屠殺にも加わるので非人の職業だと蔑まれたが、大きな旅籠の次男坊が倫落の果ての所業である。前妻ユキはその頃の女中。(中略) あきはゑんの連子だとも云われたが、実は市五郎のかくし子で、ユキが胸を病んでいた折に、たまたま亭主に逃げられたゑんが、生計の上で鶏と鶏卵の行商に出歩かうち、市五郎の子を孕んだ。

三歳から実母と父の家に入り、十五歳になるまで義母を含む父の家族と一緒に生活していたあきは、父の〈非人の職業〉の故、世間から疎外された家庭環境の中で育つ。また、時には父市五郎から打擲されたり、時折ヒステリーを起こす義母と実母には憎らしい子として扱われ、〈惨憺たる被害を蒙〉ったりする。十になっても八に見られ、二年遅れて学校に入ったあきは、斜視が目立ち、友達もつくれず、紙屑や鉛筆の屑を集めていたため屑屋と呼ばれた。家庭からは暴力を受け、学校でも屑屋と疎外されたあきは、その孤独に耐えながら、〈奈落に誘われ〉るようなさびしい少女時代を送る。学芸会であきは、案山子の役をあてがわれ、〈雀のくちばし〉につつかれたり、〈雀〉が逃げると、今度は悪童につぶてを打たれたりする。秋の野末に取り落とされた案山子にあきは、〈寂しい愉悦〉と〈澄みとおった歌いあげたいほどのおおらかな歓喜〉を感じる。自分に蔽われてくる暴力を、逃げようともしない、逃れる空間も見つけられないあきは、あえて運命として受け入れ、その暴力に愉悦と歓喜さえ覚えながら耐える一方である。〈非人の職業〉をもつ家庭から私生児として生まれた斜視のあきは、誰一人の心にとめてもらえないことのない存在であった。

あきが十五歳の夏休みに、暴力を振るっていた父が屠殺場から戸板に積まれてきて、そのまま頓死する。父の死後、その父の代わりに実母のゑんが狂ったように義母のユキとあきに暴力を振るう。その実母もいなくなって、肺病が目立ってきた義母ユキは、身体の衰弱と反対に気ばかりが立っていて、〈赤蛙の生を裂いて喰ったりする〉。生きている蛙を裂いて食べるユキの行為は、父とゑんのような目立った暴力を帯びた行動ではなかったが、それはあきらかに抑圧されていたユキの気持ちを表しているものである。ユキの死後、あきはその義母の遺言の通り師範学校に合格し、四年の時は室長になるが、新しく入った同室の美代の華やいだ皮膚に、あきは故もなく〈父の不吉な四肢を思いだし〉たりする。ここで亡くなった父はあきの暴力的行為と結びつけられながらあらわれている。

あきは畔道の露を蹴る。畔に赤い蛙を追う。指を濡らすみずみずしい生き物の感触が、眠っていたあきの狂気を呼びさまし、赤い蛙を股から裂く。

ここで赤蛙は義母を想起させるものとして登場する。あきは蛙を食べる事はしなかったが、実母のユキと同じように生きている蛙を裂く行為を反復する。父と実母から打擲され、学校からは屑屋、案山子と呼ばれ、身体的、内面的に加わる暴力と抑圧にさらされてきたものが、狂気としてあきの内面世界に潜在し、その狂気は、遂に生きている蛙を裂くという義母の行為を反復する形で初めてあらわれる。赤蛙を同じ寝室の美代の蒲団の中にしのばせ、美代が跳ね起きると、自分の蒲団の中に引入れるあきの異様な行為もまた、眠っていた狂気のあらわれであり、それは一種の変形した暴力でもある。〈あきは職員室でも、滅多に他の教師と言葉を交わさなかった。〉学校でのあきは、他の先生との交流もなく、一人ではんびりした時は、いつも富士を眺める。学校という一つの「共同体」の中で、あきは同じ先生の立場でありながらも、その中に溶け込むこともなく、「共同体」の外側の人間として存在していた。このような疎外感、あきの成長過程にすでにあらわれていた。学校から屑屋と呼ばれ、学芸会の時には、周りの役から攻撃ばかり受ける案山子の役をかわされたあきは、まさにクラスという「共同体」から冷遇され、疎外される存在であった。

このようなあきの世間とのかかわりは、あきの家庭をめぐっての問題でもある。父市五郎の〈非人の職業〉というのは、正当な人間扱いをされない、社会から排除された職業である。父市五郎は、社会から自分にかかってくる抑圧を絶えず家庭で振り回し、その暴力はとりわけなんの抵抗もできない無防備のあきに振るわれる。父市五郎が屠殺場から戸板に積まれて帰ってきたとき、あきの目に映ったのは〈脂切った父の太股〉であった。実母に打擲されたときもあきが思い出したのは、父のあの〈脂切った太股〉であった。肺病が悪化していたユキの死を予見するように、父市五郎はユキの夢の中に現れ、ゆきは溺死の夢を見る。同室の美代の華やいだ皮膚の色が、あきをいらだたせたときあらわれたのはやはり〈父の不吉な四肢〉である。父の死後、父市五郎は暴力と死を象徴するものとして、生きている家族に影をおとし、あきとユキを苦しめる。父市五郎が死んでも、この一家は見えない父の暴力に支配されている。父が〈非人〉の扱いをされたのは、屠殺という職業を持ってからであり、その父をもっているあきの家庭も当然ながら社会から〈非人〉の家庭とみなされる。父市五郎が暴力的だったのは、屠殺業に対する〈非人〉扱いから来る暴力性に対しての反発である。ユキの夢に市五郎が現れたり、師範学校時代のあきが父の〈不吉の太股〉を思い出したのは、父市五郎が亡くなくても、社会から来るこの家族に対する暴力はそのまま温存されていたからである。そういう意味で父市五郎は〈生き続け〉ている存在であった。

あきが学生に鞭を打つのも単なる自分を蔽っていた暴力への反動、あるいは父や実母から受け継がれてきた〈遺伝〉²¹をめぐる問題だけではない。先生と学生という関係において、あきは明らかに先生という強者の立場に立っており、学生である上田は弱者の立場である。先生の質問に「わかりません」と答える上田に、あきは執拗に鞭をからませながら、加害者としての自分の行動に罪の意識でも感じたように、その日の夜は上田とつゆのを家に呼んで、御馳走をする。ここには弱者に対するあきの思いが描かれている一方、暴力を振るう立場である加害者への違和感が描かれている。暴力の問題はこのテキストの基調をなしているものでもあるが、そこには檀一雄の当時の部落問題と「家」に対する認識がうかがえる。真鍋呉夫は、檀一雄のデビュー作品である「此家の性格」(『新人』創刊号

1933. 11) に使われていた差別用語「穢多奴」という言葉を、作品が発表された当時の部落問題と結び付けながら次のように述べている³⁾。

本篇の「穢多奴」という差別用語がほかならぬそういう差別意識の持主によっていわば必然的に口にされているだけでなく、客観的には前記のような部落解放運動の高まりに対する威丈高な「虚勢」として表現されていることに、読者の注意を喚起しておきたい。

ここで指摘されているように「此家の性格」では、「穢多奴」という差別用語を用いることによって部落解放運動の「虚勢」を示そうとしていたとすれば、「樹々に匂う魚」で檀は、父市五郎をはっきり〈非人の職業〉をもつ人物として造型することで、部落解放運動の裏側に潜んでいる暴力と、抑圧された弱者の問題を示していたのである。実母と義母が一つの家庭の中で、共同で生活するあきの家族は、部落問題以前に、近代的家族制度に反するゆがめられた家族関係を持っており、そのような意味であきの家庭は、社会から疎外されつつある存在である。その疎外感、いつまでも周りの環境になじめなかったあきの成長過程からも示され、戦時下の「家」と制度の問題があきのそのような家庭と成長を通じて提示されている。「樹々に匂う魚」が発表された1937年は、日中戦争が全面開始される年でもある。最初の短編集『花籠』の出版記念会の予定日に、召集令状を受けた檀一雄は、当時の心情を次のように述べている。

生涯である時ほど、ほっとしたことはない。かりに地獄直行の列車へ乗り込むような令状がきたとしても、私は莞爾として、出発しただろう。

太宰治との交遊が〈破滅の寸前まで追い込〉まれ、〈狂乱を演じ〉ていた最中から〈救われ〉た気持ちを素直に表現している文であるが、檀は1937年が〈実に陰鬱な年〉で、〈あのような時期に耐えることができた自分を今でも不思議に思〉うと、繰り返し1937年について語っている（『孤独者』『文芸世紀』1942. 12）。同じ「青春放浪」の中でも、1933年から1937年に至るまでの時期を、〈険しく狭い山の尾根を、あやうく駆け渡ってゆくような狂瀾怒濤の毎日〉だったと回想している。檀の言葉を借りればそれは〈家族的ふんいき、ないしは社会的連帯から、早く放逐され〉たからであろう。その〈放逐〉の中で〈狂乱した〉檀を支えてくれたのがほかならぬ文学である。

私達の一人一人に息づいていたあやしい、モヤモヤとした文芸の気運が、何かしら、この「日本浪漫派」と云う不可解な集合体の中に吸収され、醗酵され、開花していきそうな予感があった。

これは、檀が「日本浪漫派」と出会った時期を回想した「暗い時期」（『文学』1955. 3）というエッセイの一節である。1934年に太宰と檀らが立ちあげた『青い花』は、1935年『日本浪漫派』と合流するが、当時の檀の心情を表しているこの文章には、閉鎖された空間への行き詰まりと、『日本浪漫派』への共鳴と期待感があらわれている。

よく知られているように1937年に発表された太宰治の「燈籠」（『若草』1937. 10）は、太宰の作家活動の一つの転換期の作品として評価されることが多い。作中のさき子は二四歳の貧しい下駄屋の娘

であるが、テキストの冒頭部分でさき子は自分の出自について語っている。さき子は町内の顔ききの地主のおめかけである母が父と話し合っただけで生まれたが、〈私の目鼻立ちが、地主さんにも、また私の父にも似てゐない〉ため、世間から〈日陰ものあつかひ〉を受けている。「私」の家族が〈日陰ものあつかひ〉をされるのは、母がめかけだったからであり、このようにさき子の家庭は世間とうまくつながらないまま、むしろ世間から対立するような形で世間の中で存在していた。社会情勢の緊張が高まっている1937年のほぼ同じ時期に、社会から疎外されつつある家族を描いた太宰治の「燈籠」と檀一雄の「樹々に匂う魚」が発表されている。山崎正純は、民衆が制度化された「家」の外側に出ることの難しさを意識しつつあったのが、1937年の太宰の認識であると指摘しているが⁴¹、このような認識は、檀一雄が太宰と共有していた時代に対する認識ではなからうか。

2. 〈大望〉について

赴任地の学校であきは後に恋人となった唐島に出会う。

唐島は唱歌の時間が受持てぬので、あきの体操の時間と代わっている。そんな時間には大抵生徒を連れだして、野原に寝そべりながら、生徒に踊りを踊らせる。あきは腹が立つが、フランスの新しい教育法はこれですよ、と唐島はいつもいい加減な嘘を吐く。

生徒に激しい刑罰を試みながら、厳しく接しているあきと対照的に唐島は、〈フランスの新しい教育法〉を取り入れ、体操の代わりに踊りを教える。日本の近代化とともに現れた体操が健康と結びつけられ、国民の心身を鍛える一環としてラジオ体操が普及されていたことは周知のことである。日中戦争が始まってからは、ラジオ体操が国民精神総動員にも用いられ、戦争と深いかかわりがあったことは言うまでもない。自由を象徴するフランスの教育を取り入れ、体操の代わりに踊りを教える唐島の教えは、当時の制度が必要とする教育の方針とは距離が遠すぎるのである。故にあきは唐島の教えが〈いい加減な嘘〉に過ぎないものと感じられ、腹が立ったのである。

〈大島つゆの〉〈はい〉〈立派な女になるのにはどんな心懸けが大切です〉〈……〉〈きこえません。はっきりと〉〈勉強します〉〈それから〉〈優しくなります〉〈よろしい。上田次郎〉〈はい〉〈立派な男になるのには〉〈大望をもちます〉〈え？もう一度……〉〈大望です〉〈大望？〉

あきは聞きおぼえないこの言葉を終日、雨の音のなかにいぶかった。すると次第に胸はふくらみ上がり、その言葉の透明な実現が、かえって自分の場合にだけ可能であるという不思議な可笑しさがこみあげた。人類の儚い興亡のうしろに、ありあり自分の姿までがにおってきて、その錯誤と光榮は硝子越しに見る人形芝居のようにひっそりと掌のうちに感じられる。

ここで、あきの質問は〈立派な人〉に重点があるのではなく、〈立派な女〉と〈立派な男〉という性差をつけることに重点が置かれている。当時の社会が必要とする〈立派〉であることの意味と〈女〉と〈男〉の性差が区別されることによって、〈女〉と〈男〉が果たすべき役割が強調されている。それは〈女として〉あるいは〈男として〉、それぞれの立場にふさわしい役割を果たすことを強要するものである。〈女〉が〈勉強〉することと〈優し〉くなるというのは、まさに〈良妻賢母〉に象徴

される賢い母と良き妻を意味しているものである。明治の文明開化が、近代的理想の女性像を〈良妻賢母〉に求め、〈立派な女〉の役割を果たすことを要求していたとするならば、〈男として〉天皇のために忠誠を誓う〈大望〉をもつことが、〈立派な男〉に求められたものであつたらう。このような意味で体操の時間に踊りを踊らせる唐島は、東大出身とは言え、〈大望〉をもった〈立派な男〉にふさわしい人物とは言えない。当時の教育現場において、〈大望〉をもつ子ども達を育てる先生こそが、〈先生として〉その使命を果たした〈立派な先生〉であつたのは間違いない。あきが聞きおぼえないこの言葉にいぶかしさを感じるのは、先生である自分にとって〈大望〉とは何であるかという疑問があつたからである。あきは義母ユキの遺言の通り先生になったがそれは、先生になることで〈非人〉の扱いから逃れてほしいという義母の願いだったかもしれない。〈非人の職業〉の父を持つ家庭で生まれ、抑圧されながら生きてきたあきにとって、先生になることそのものが自分の理想—〈大望〉でもあつたらう。あきが〈その言葉の透明な実現が、かえって自分の場合にだけ可能である〉と感じるのは、今まで向き合ってきた現実が如何なるものであるか、自らの成長を通じて十分に察していたからである。しかし一方であきは、自分の〈大望〉と異なる社会が必要とする〈大望〉に気づく。ここで〈人類の儂い興亡〉というのは、明らかに当時の戦争状況を表すものである。そのような社会に認められる〈大望〉に気づかされたあきは、初めて〈ありあり自分の姿〉を発見し、自分を含む人々の生が操られている〈人形芝居〉のように感じる。〈芝居〉というのは脚本に沿って自分の本音を隠し、演じることであり、〈人形芝居〉というのは、〈人形〉が人に操られ、行うものである。〈大望〉のために生きる〈自分の姿〉が〈人形芝居〉のようなものであることに気がついたとき、あきは〈生きるということはつねに一方的の債務〉であると感じたのであろう。

〈一年は何日ですか〉〈三百六十五日〉〈閏年は?〉〈……………〉〈中略〉〈上田次郎〉〈はい〉〈閏年は?〉〈三百六十六日〉〈何故ですか?〉〈二月が二十九日です〉〈閏年は何年に一度ずつですか〉〈……………〉

檀が〈閏年〉と〈大望〉について触れたときに、少なくとも作品が発表される前の年に起きた「二・二六事件」を意識していたのは間違いない。あきの質問に頻りに「閏年」が強調されているのも、「二・二六事件」が起きた1936年が、ちょうど閏年にあたる年であつたからである。「五・一五事件」の後には「国体明徴声明」が出され、その翌年には「二・二六事件」が起きる。あらゆる領域で統制が厳しさを増し、自由が抑圧されている現実を、檀は〈硝子越しに見る人形芝居〉の世界と表現していたのである。その現実の中にある〈自分の姿〉に目を向けたとき檀は、〈人形芝居〉の世界で、〈立派〉に演じることを拒んでいただろう。

3. 表象としての富士

「樹々に匂う魚」の冒頭部分にはあきの故郷である甲州が示され、そこから富士が見えることが強調されている。あきの出自とともにあらわれた富士は、その成長過程においても環境の変化にもなつてあらわれている。〈秋風と一緒に、縁先からの富士が驚くほどよく晴れる〉日、実母さんは家を出たまま帰ってくるのがなかった。父を亡くして、実母が家を出たのは本来悲しいことであるが、あきはむしろ、その日から義母のユキと平穏に暮らしながらユキの看病を続ける。

ユキは翌年の春からしきりに咯血した。体が衰えると反対に気は立って、赤蛙の生を裂いて喰ったりする。それをあきは雨後の田圃に探しに行った。富士の膚を水っぼい雲がかすめている。露の多い草原を冷や冷や追いつがって、ふいに指を濡らす蛙の感触と一緒に、真後ろから富士が逆さにのぞいたりする。

生きている赤蛙を裂いて食べるほど気が張っていた義母のため、あきは蛙を捕りに田圃に出る。ここであきの眼に映ったのは、〈水っぼい雲がかすめてい〉る富士であった。雲がかかった富士は、実母の家出の時に現れた〈驚くほど晴れ〉た富士とは対照的に描かれている。〈晴れた〉富士が、その後のあきとユキの平穏な生活を象徴的に描いたとすれば、〈水っぼい雲〉の富士には、衰えてゆくユキに対するあきの不安が描かれている。晴れた日も曇った日も富士はいつもあきの生活に伴っていた。

或日、あきは寄宿舎の裏山を廻って田圃に出た。まぶしいほどの富士が丁度眼の前にそうてきて、久しく埋れていたうずくような冷たい山の愛撫があきの膚をしびらせた。あきは畔道の露を蹴る。畔に赤い蛙を追う。指を濡らすみずみずしい生き物の感触が、眠っていたあきの狂気を呼びさまし、赤い蛙を股から裂く。

あきは其の夜、美代の蒲団のなかに赤蛙をしのばせた。美代は消燈の闇のなかではねおきる。「なあに、なあに」と覗きこむ室生をあきはきびしく制して、美代を自分の蒲団の中に引入れた。あきは寝つかなかった。美代の皮膚が体に匂うて、昼間の蛙が眼に跳ねる。それでもあけがた、白い富士を心に抱いて、あきはほんと眠りこんだ。

蛙と富士はユキとの生活の記憶を呼び起こすものとして現前化されている。〈白い富士を心に抱〉いたとき、初めて実体としての富士があきにとって象徴性をもつものとしてあらわれていた。いつも遠く見られていた富士は、あきの内面世界に溶け込んで、あきの身体と一体化されている。あきは〈白い富士を心に抱〉くことによって、自分の狂気的な行為への不安を解消し、〈ほんと眠る〉ことができたのである。

けれども教室のあきは別人のように鋭くむごい。明け放った窓の外に富士が冴え、あきは絶えず鞭を鳴らす。つゆののおびえた泣べそはたまらなくいとおしかった。それで次郎の腕に鞭をうつ。

あきは職員室でも、滅多に他の教師と言葉を交わさなかった。大抵ほんやりと富士をみる。富士はあきの守護神のように膚身にそうて冷たく甘い。

ここで実体としてあらわれていた富士は、あきを保護する神の存在としてあらわれている。〈白い富士を心に抱〉いたのは、富士と一体になりたいという気持ちでもあり、富士を〈冷たく甘〉く感じるは、富士への親密感を示すものである。生まれ「故郷」と家族の影を伴う富士は、あきにとっては自分の「故郷」を象徴するものでもある。「故郷」を象徴する〈富士を心に抱〉き、さらに〈冷たく甘〉く富士に親密感を覚えるのは、あきの「故郷」への思いと、「故郷」と一体化したいという願いが秘められていたからである。他の先生と交流もなく、富士を〈守護神〉のように思うことには、救

われたいと思いつつも、自分の居場所を見つけられないというあきの心情が示されている。

師範学校を卒業したあきは、血のつながりのない叔父がいるお寺に向かう。父と実母のゑん、それに義母のユキの姿もすっかりなくなってしまった「故郷」には、あきを待っていてくれる人は誰一人いなかった。そういうあきにとってお寺は「故郷」的安定感を持たせる場所でもあっただろう。しかし、またそこを離れていくあきにとって、安住できる「故郷」なる場所は存在しなかった。「故郷」なるものを富士に抱きながらも、その思いとのずれは、まさに檀と「故郷」の問題が重ねられたものでもあった。

私の来歴を語るについては、私はまず、生まれたときから自分の故郷を喪失していたということを書いておかなければならない。

かつて檀一雄は、「青春放浪」の中で〈生れたときから故郷を喪失〉していたことを述べ、家庭の事情で転々としていた少年時代について回想していた。あえて〈故郷の喪失〉について触れていることに、檀の「故郷」に対すると憧れと無念という二律背反の心情がうかがえる。あきの出自とその成長過程に頻りに描かれた富士に、山梨出身の檀の〈喪失された故郷〉へのあこがれが秘められているのではないだろうか。

私は深夜起き出しては、離れに一人端座した。「夏草」という小説に手を染めていたのである。けれどもそれは一行とすすまなかった。私は書いては破り、書いては破った。私達の迷妄の昏さが時代の不思議な停迷と混りあって、拭い難い暗鬱の時期を形成していた。

これは「孤独者」の一節であるが、ここに1937年の檀の心情と「夏草」を小説として仕上げようとしていたことが明らかになっている。「樹々に匂う魚」と同じ時期に書かれた「夏草」は、未定稿のままに『日本浪漫派』に発表されたが、その冒頭に〈一人の少女を迎へ入れるやう〉に、〈一鉢の月見草〉を居室に入れる「私」の月見草に対する特別な感情が描かれている。「樹々に匂う魚」では繰り返し富士の存在を強調し、同じ時期に書かれた「夏草」では月見草について触れていたことを合わせて考慮すると、後に書かれた太宰治の「富嶽百景」（『文体』1939.2～3）の「富士には、月見草がよく似合ふ」という一句と、どのような関連があるかを考えるのも興味深いことである。檀が太宰からの文学的影響を受けていたのは周知のことであるが、富士と月見草を描くことに直接の影響があったとは言えない。しかし、両者が描いた富士は、国家的象徴とは切り離された個人的な記憶との関係で描かれたものであり、どこかくすんだ富士であった。数年後、「夏草」は未定稿のまま完成に至ることはなかったが、「樹々に匂う魚」はその続編として「裾野少女」が発表される。

4. 「裾野少女」

夜の富士がくっきり浮かんでいる月の明るい日、あきは唐島に誘われ、一緒に先生を辞めることを決める。それから半月くらい同棲生活がはじまったが、家を出たまま一ヶ月も便りがない唐島を探しに、あきは住所をたよりに旅に出る。あきは月の明るい風景と田舎の人の優しさにふれながら、やがて唐島の家に向きつくが、唐島は「満洲」に渡って家にはいない。あきは月明の中に崩れていく阿蘇の

噴煙を眺めながら宿に戻る。次は、あきが辞職を決めた唐島と夜道を歩いていた際に、あきの目に映った夜の風景描写である。

水車は水と月光を拾いながら廻っていた。その明暗の美しい交錯をふるわしつづけて、静かなゆるい断続の音が響いていた。水滴が月の逆光を浴びて百千の真珠のようにきらめき落ちる。何という長いとめどない営みだろう—あきは向うむきに佇んだ唐島の黒い影を見つめながら、そっと自分に呟いた。

水車、水、そして月光。ここで自然の美しさが描かれている。しかし停まることもなく廻り続ける水車をみながら、あきは生きることの虚しさを感じる。それは先のことを考えることもなく先生を辞めてしまった唐島のことが気になってからであろう。一方、唐島は〈いい気持。まるで月の光を飲んでいようですよ。〉と美しい自然に溶け込んで、その美しさを満喫する。テキストの冒頭部分から月の明るい夜の富士が描かれ、富士と月に対する描写が多く見られる。唐島に誘われ、一緒に先生を辞めたあきは半月くらい同棲生活を送るが、急に家を出たままの唐島からは一ヶ月が経っても便りが無い。あきは障子の上に映っている富士の倒像を見つめながら唐島のことを思い出す。煙草屋のおかみに〈旦那さん〉のことを聞かれ、あきは唐島の住所をたよりに九州へ旅に出る。から電車の中から真赤に染まった富士が浮かんでいる。

裾野は早い夕暮の霽である。その紫の霽の間に幾条も幾条も細い夕餉の烟が上がっていた。列車はその富士の夕映えを左に廻ったが、いつのまにか淡い余光の雲に蔽われた。

ここで裾野に住んでいる人々の生活の営みを象徴する〈夕餉の烟〉が描かれ、あきと唐島の二人の世界の中に書かれていた富士は、裾野に住んでいる人々の生活空間と関わりながら書かれている。真赤に染まった富士を眺めながら電車に乗って阿蘇へ出発するあきは、〈浜松から急行に乗り換える心算でいたのだが、みすほらしい自分の旅の心に、この列車の方がよっぽど似つかわしい〉と、そのまま普通列車に乗り続ける。熊本まで行くためには、もちろん列車に乗って移動するしかないが、あきは急行に乗り換えることをあきらめる。戦時下において鉄道は人の移動だけではなく、武器や戦争に必要なものを運ぶにも多く利用されていた。あらゆる領域で統制が強まっていく中、特急、寝台列車が減少されるなど旅行業も制限を受ける時期に、急行に乗るのも容易なことではなかっただろう⁵¹。〈みすほらしい自分の旅の心〉が急行をやめる原因になったとも考えられるが、その裏側にはこのような当時の鉄道の運営状況がうかがえる。

夜中の汽車に揺れながら、あきは車窓の外の月を眺め、そのまま眠り、起きたら明るい月がまたあきの目に入る。富士は離れていくが、月はどこまでもあきと同行する。あきは外の月を見ながら、初めて唐島への自分の愛情を確信することになり、〈この月のある限り私のいのちをひろげ〉ようと誓う。向こう側に座っているお爺さんにあきは、目的地を聞かれるが、その地域はよくわからないとお爺さんは車掌を連れてくる。あきは車掌まで連れてきて助けようとする田舎の人の優しさに感動し、駅弁を買ってお爺さんに渡す。よく聞かれる旅先での美しい旅の物語である。熊本に着くと朝陽の中で自転車の女学生が学校に急ぐ姿が見え、あきは羨ましそうに眺めている。「裾野少女」が「樹々に

「匂う魚」の続編とは言え、「裾野少女」の生徒に対するあきの思いは、「樹々の匂う魚」と全く違っていた。学生たちの騒ぎと〈生きるという果てしない連続〉に、〈この子供らをみな殺し〉たいという思いさえ覚えていた「樹々に匂う魚」のあきだったが、「裾野少女」のあきは、電車から降りる大勢の学童達のおしゃべりに、〈心がほとびるばかりのなつかしいときめき〉を感じたり、〈陽やけした少女達の嬉々と美しい頬のあたりや房々なびく毛髪をはげしい羨望のところで眺め〉たりする。

やがて阿蘇の連山が見え、〈ゴー〉と地軸を揺るがすような音とともに黒い噴煙が飛びあがる。「裾野少女」が発表された1943年には、阿蘇山の第一火口に新火孔が生成し、大量の灰が飛んでいた年でもある。火山灰が白くかぶっている山道を歩いて唐島の家に通いついたあきを迎えてくれたのは、唐島ではなく、齒の抜けた一人の老婆であった。そして老婆から「満洲」に渡ってから行き先も何も分からなくなった唐島のことを教えられ、あきは〈齒をくいしばって〉山道を歩いて宿に戻る。〈噴煙は月の光にすさまじく照りかえりながら、上へ上へと幾層も盛り重なって、やがて月明の空の中に崩れていった。〉テキストの最後の一句であるこの部分には、自分の悲しみを黒い噴煙とともに夜空に噴きあげようとするあきの心情が象徴的に描かれている。そして〈この月のある限り私のいのちをひろげよう〉というあきの生きることへの信念が、富士—「故郷」を離れ、噴煙が噴き上がる阿蘇—異郷の月夜で再確認されている。

あきの〈恋物語〉ともとられる「裾野少女」には、月の明るい美しい葡萄畑に浮かんでいる富士、そして裾野の夕餼、煙草屋のおかみ、朝早く元気に登校する子供たち、優しい田舎の爺さんなど、自然と普通に生活を営んでいる一般庶民の様子が淡々と語られ、戦時下と言ってもそれほどの緊張感を与えるような場面は書かれていない。しかし、あきと唐島を除いてテキストに登場する人物は、学校に通う子供達と戦場に行けなかった年寄りが殆どであることに気がつく。唐島の家に着いた時、あきを迎えてくれたのは齒の抜けた隣の老婆であり、唐島の母親は妹の一周忌の法事に熊本へ出かけていて、父については語られていない。父の不在は〈父〉を戦場に送りだしていた多くの家庭を連想させるものでもある。また〈ドーンドーン〉と重い砲声は戦争が続いていることを示すものであり、あきの急行列車への戸惑いは、当時の鉄道の状況を裏づけるものでもある。かくの如く「裾野少女」には、戦時中であることが書かれている一方、戦時下の人々の日常生活が投影されており、人間の温もりが描かれている。「裾野少女」が発表された1943年は、ちょうど檀の長男太郎が生まれた年でもある。「満洲」で〈放浪〉を重ねていた檀にとって、これは初めての経験でもあり、父になることで、檀はより安定した生活に憧れていただろう。「裾野少女」の文体も〈疾風怒涛の時代〉に書かれた「樹々に匂う魚」と違って、自然に対する美しい描写が多い。新しい生命の誕生とともに、より実生活を充実させようとする願いと民衆へのまなざしが、あきの〈恋物語〉として語られていたのである。

この「恋物語」はあきの九州への旅と切り離せない。あきは自分の「故郷」である富士を離れ、異郷の九州へ向かうが、唐島の故郷である九州に〈こんな田舎か、としきりに唐島の故郷をなつかしがった。〉という言葉には、どこか安堵しているあきの気持ちさえ感じられる。富士を離れ、異郷の阿蘇に親しみを感じているのは、あきのたくましく生き延びようとする心情を表すものでもあるが、一方で、そこには伝統的「故郷」が否定されている。その伝統的「故郷」なるものへの否定は、九州を「故郷」とする唐島の「満洲への旅」によっても表われている。「裾野少女」には、「故郷」を離れていく〈旅物語〉によって、伝統的「故郷」への回帰の否定が示されていたのである。

5. 「樹々に匂う魚」と『満洲浪曼』

檀が二度目に「満洲」に渡ったのは、召集が解除された後の1940年の12月である。1936年8月の最初の渡満から二度目に至るまで檀一雄の創作は、「樹々に匂う魚」、「夏草」と二、三編の詩に尽きる。第一創作集『花筐』の出版記念の予定日に突然召集令を受けた檀は、手もとにおいていた「樹々に匂う魚」と「夏草」を入隊直前に緑川貢に託し、緑川は「樹々に匂う魚」を『早稲田文学』に、「夏草」を『日本浪曼派』9月号に発表したという⁶⁾。『僻土残歌』には、「樹々に匂う魚」以外にも『僻土残歌』、「悲歌」、「風信」、及び「文芸奉還説」が発表されるが、一人の作家がこれほど注目されているのは『満洲浪曼』史上でも異例なことだと言われている。『満洲浪曼』の執筆者が段々減っていく中、北村健次郎に〈青年大将〉と呼ばれた檀は、言うまでもなく有力な執筆者の一人だったのであり、檀に対する期待も大きかったのは間違いないことであろう⁷⁾。檀と『満洲浪曼』とのかかわりは、『満洲浪曼』第6輯(1940.11)に「月地抄」と題した二首の短詩を発表してから始まるが、『満洲浪曼』はこの第6輯で廃刊を迎える。『満洲浪曼』の廃刊後、『僻土残歌』という書名で出版された満洲浪曼叢書・春季作品集は、檀の「僻土残歌」という詩のタイトルからとったものである。創刊から満日文化協会の支援を受けながら文祥堂より出版された『満洲浪曼』は、第6輯から興亜文化出版社へ移行することになるが⁸⁾、「内地」の出版物への統制が段々厳しくなるにつれ、「満洲」にも影響があったのは間違いないだろう。

これを受けて『満洲浪曼』の中心人物である北村謙次郎は、「跋にかへて」の中で〈満洲浪曼新発足〉を呼びかけ、〈真の文学道〉への樹立を、新しい出発の理念として掲げていた⁹⁾。既に述べたように『満洲浪曼』に再録された「樹々に匂う魚」は、1937年に発表された作品だが、時間的に『満洲浪曼』の成立とずれがあり、「満洲」と異なる「内地」の、〈非人の職業〉をもつ家庭に生まれたあきを主人公としたという点では、空間的にも「満洲」と隔たりがある。しかし、「樹々に匂う魚」という極めて象徴性の高いタイトルや、あきの数奇な運命と繰り返しあらわれている富士、結末に強調されている〈大望〉に、『満洲浪曼』は〈満洲浪曼新発足〉への接点を見つけようとしたのではなかっただろうか。季刊誌として発行される予定だった『満洲浪曼叢書』は、その後継続されることもなく春季で終わったのである。

檀一雄と「満洲」のかかわりについて長野秀樹は、檀の「満洲遍歴」を、檀の「女性遍歴」と決めつけるのは不適切であり、『青春放浪』はあくまでも戦後に書かれた作品で、まず検討すべきなのは同時代の作品であると指摘している¹⁰⁾。檀の〈眼に見えぬ大満洲国〉を語る事が〈積極的に地上の満洲を擁護〉し、〈満洲の現実を隠蔽〉する¹¹⁾ことであるとは断定し難いものではないだろうか。「風信」には、満洲里を〈僻土満洲里〉と表現し、また「僻土残歌」という詩のタイトルは、「王道楽土」と違った「満洲」の現実を表現しようとしていたものであろう。〈地上の、眼に見える満洲国なんぞ、偽であれ、ホンモノであれいくらでも忙んだり興ったりする〉と語る檀が、どこまで「満洲国」を「国」として真剣に受け止めていたかについては未だ疑問が残る。『満洲浪曼』第6輯に収録された「月地抄」は、檀が二度目に満洲に渡る直前の1940年11月に発表されたものである¹²⁾。召集時代の檀の文学活動は空白期間でもあると言えるが、召集が解除されてからも檀は創作活動にそれほどの意欲は見せていなかった。しかし、召集解除の前から、文学について考えていたことは確かなことであろう。そして大連についた直後に檀は、「回想と詩人」(『大連日日新聞』1940.12)というエッセイを発表し、〈人間の内部から湧き立ってくる純潔な勇気と贈与の希願は巷説の中に塗抹され流布

されて、人間が人間を愚弄する不信)な時代が続いていたことを訴えていた。

〈君は書け〉と彼は突然叱咤した。〈東京の奴等の、トント肝を冷やすような小説を書け。あいつらが、膝頭をカタカタ震わすような。慾のない、マッサラの途方もない小説を書いちまえ)〈うむ。けれども小説はもう廃業かも知れん〉と、私は久しく忘れていた、文学というものの今日の形相を見つめかえす心地であった。するとそれは身すばらしい、ゆがんだ汚辱の一拠点に見えた。なによりもその卑屈な安住が耐えられぬくらい不快である。彼等が招きよせている真理や、理想や、美というものが、芸術の乏しい運命だとするならば、〈よし俺は廃業だ〉と突然私もどなりはじめた。

三年ぶりに「満洲」の寛城子で会った秋沢三郎に「私」は、「内地」の小説家を驚かせる小説を書くことを勧められ、今日の文学について見つめかえすが、そこにうつしだされた〈身すばらしい、歪んだ汚辱〉に気付かされる。〈小説はもう廃業)かも知れないと自信をなくすような言葉を吐き出す「私」は、「内地」の芸術に視線を向けたとき完全に〈廃業)を宣言する。この「孤独者」の中で檜は、「内地」の文壇を意識している安住できない「私」を描いていた。『青春放浪』には、確かに〈無頼な生活)を送りながら〈放浪)する自画像を描いているが、「満洲」の遍歴は単なる荒唐無稽な〈夢物語) ¹³⁾ だけで終わったのではないだろうか。「満洲」に渡ってから間もなく『満洲日日新聞』に掲載された「漆黒の天国」(1941.1)は、イエスの受難を見降ろしながら、〈人間どもの愚かさ)を冷笑する〈漆黒の帝王)と自称している鴉によって語られた寓話である。「漆黒の天国」が発表される前の年に太宰治は、『中央公論』に「駆込み訴へ」(1940.2)を発表するが、檜はそれを意識しながら「漆黒の天国」を書いたに違いない。この点については、二つの作品の類似性を指摘している相馬正一によってすでに論じられている。〈人間共は何という禍いか)、〈人間のやることなんぞ相手になるか)と、人間界に不信をもって、〈「聖」と「俗」の二つの世界を鳥瞰的) ¹⁴⁾ に見せたこのテキストは、「王道楽土」と現実の「満洲」との落差を語ろうとしていたものでもある。

しかしこのような考えを檜は、第一回目の渡満から既に持っていたと思われる。この「樹々に匂う魚」という題名から思い浮かぶのは「縁木求魚」の熟語である。周知のようにこの熟語は、戦乱の時代孟子が「王道論」を引っさげて戦国諸侯に会い、しきりに説得に努めていたことに由来する。戦争を好まないが、〈大望)のためにはやむをえないと答える宣王に、孟子は戦争を起し、武力で領土を拡大していることこそが、木に登って魚を求めることと同じであるとする。「樹々に匂う魚」には「満洲」に直接かかわる表現は見当たらないが、この作品が「満洲」を〈放浪)し、帰国してから書かれた作品であることに注目したい。〈大望)と戦争(暴力)が結び付けられた「縁木求魚」の語源を連想させる「樹々に匂う魚」という題目に、「満洲事変」以後一方的に建設された「王道楽土」と呼ばれた「満洲国」への疑問と、軍事政権が勢力を強めていく当時の国内情勢への反感がうかがえる。一方で、「樹々に匂う魚」という言葉には、目的と結果のずれという意味も含まれている。魚は本来水の中で命を維持するものであるが、そのあるべき場所を離れ樹に登る「樹々に匂う魚」というのは、まさにテキストのあきと「共同体」をめぐる問題と深いかわりを持ち、そしてまた三節で既に述べたように、あきと「故郷」への思いのずれを象徴的に語るものでもある。「故郷」というのは人間がその場になじみ、生活の基盤を持っている場所で、一つの「共同体」でもあるが、あきはその「共同

体」の外側にいるいつも孤独な存在であった。富士はあきの「故郷」でありながらも、決してあきが安住できる場所ではなかった。あきの「故郷」とのミスマッチは、檀の故郷への思いとも重なったものでもある。

このような「樹々に匂う魚」という題目に内包されている二つの側面—「満洲国」と国内情勢への違和感と、「故郷」へのまなざし—を、檀は「樹々に匂う魚」という作品に託したのである。

おわりに

「裾野少女」では、あきの旅によって富士から阿蘇へと列車による空間的な移動が行われ、その移動の過程においても頻りに月のある風景が現れている。テキストの冒頭に書かれた富士が浮かんでいる美しい夜の景色と違って、終わりでは阿蘇の黒い噴煙が噴き上がる明月の夜が描かれている。戦時下において、富士山や桜などの風景が、日本の伝統や文化などと結びつけられ、日本の精神を象徴するものとしてよくとらえられていた。

私はその友人に、火山の月夜的美観も亦神ながらであることの意味を見せてやりたいと思つた。さういふことを山を登りつつ思ひ出した。不動の山が忽ち火を吐くことは、日本人の雄心に似てゐるのである。しかしその火を吐く山が月光に照りかへるさまは、日本の丈夫の志の風雅である¹⁵。

保田與重郎が、〈不動の山が忽ち火を吐くことは、日本人の雄心に似〉ていて、〈火を吐く山が月光に照りかへるさまは、日本の丈夫の志の風雅〉であると、火山を日本人の精神を象徴するものにとらえ、〈国栄えん〉と月は照ると表現していたことに対し、檀はその月に照らされている地上の自然とその自然とともに生きている人々の営みを描いている。富士が美の象徴、また、民族の精神の無量の糧にとらえられ、永遠、崇高、権威といった精神の象徴としてとらえられていたとき、檀はあえて富士から離れていく物語を描く。いずれにしても檀のこの二作に書かれている富士や、月、火山などの自然や風景は、〈文化文芸思想の創造の母胎〉¹⁶とする「風景」とは距離をおいて描かれているものである。

かつて檀は「『地下の島』について」（『コギト』1943.2.127号）というエッセイの中で〈僕は少年の日から様々の愛情と数知れぬ故郷の間を浮浪したから、いつもはぐれた風と光の中に己の夢の郷愁をたのしんだ〉と述べている。固有の場を持たない〈数知れぬ故郷〉とはまさに、固定的場所を持ち、そこに「故郷」の伝統を導こうとする「故郷」とは相反するものでもあろう。既に述べたように、「裾野少女」には、富士が浮かんでいる美しい月夜が描かれ、その富士を離れて旅する時にも、月はあきと同行する。あきにとって、「故郷」とは月の光の彼方に存在する空虚なものでもあった。いかに「故郷」と「伝統」に回帰するかという1930・40年代の言説空間において、檀は富士（「故郷」）から離れていくあきと、「故郷」にあるべき個人の不在—「満洲」に行ってしまった唐島—を描くことで、「故郷の不在」を描いたのである。

「樹々に匂う魚」では、富士に「故郷」が象徴され、あきはその「故郷」にあこがれているが、しかしその思いとはずれている「故郷」が提示されている。一方で、「裾野少女」のあきは、「故郷」である富士を離れ、異郷の阿蘇にいのちを続けていく場を見出そうとする。伝統の象徴でもある富士

(「中心」)から「周辺」の阿蘇へ向かうあきの旅は、「周辺」から「中心」に向かう流れと逆行するものでもある。「裾野少女」では、「故郷」を離れていくあきの旅と、「満洲」に行ってから音信不通になった唐島の「廃郷の旅」によって、伝統的「故郷」が相対化され、「故郷の喪失」が示されている。このように両作品は、「故郷」を喚起するもの—「故郷」の「伝統」と「喪失」の問題—として、対になっている作品として位置づけられる。

注

- 1) 荻久保泰幸「檀一雄」『国文学 解釈と観賞』、1998. 6、99頁。
- 2) 呂元明『「満洲浪漫」の全体像』『満洲浪漫』別巻、ゆまに書房、2003、37頁。
- 3) 真鍋呉夫「『此家の性格』について」『檀一雄全集』第1巻、新潮社、1977、393頁。
- 4) 山崎正純「昭和十二年」『国文学 解釈と鑑賞』、1993. 6、80頁。
- 5) 原田勝正「戦時体制下の鉄道」『日本の鉄道—成立と展開—』、日本経済評論社、1986、263頁。
- 6) 相馬正一「疾風怒涛時代」『檀一雄—言語芸術に命を賭けた男—』、人文書館、2008、181頁。
- 7) 注2)に同じ。
- 8) 呂元明『「満洲浪漫」の全体像』『満洲浪漫』別巻、ゆまに書房、2003、23～24頁。
- 9) 北村謙次郎「跋にかへて」『満洲浪漫』第6巻、ゆまに書房、2002、249頁。
- 10) 長野秀樹「檀一雄と中国・満州」『叙説』、1995. 1、22頁。
- 11) 川村湊「偽りと幻の新都—新京」『異郷の昭和文学』、岩波書店、1990、115頁。
- 12) 長野秀樹「檀一雄と『満州』・再説」『叙説』、2006. 1、54～55頁。
- 13) 注11)に同じ。113頁。
- 14) 注6)に同じ。215頁。
- 15) 保田與重郎「月夜の美観」『保田與重郎全集』第16巻、講談社、298頁。
- 16) 保田與重郎「風景と歴史」『保田與重郎全集』第16巻、講談社、373頁。

※檀一雄の文章からの引用は『檀一雄全集』(新潮社 1977～78)、『青春放浪』(筑摩書房、1956)『檀一雄』(野原一夫編 日本図書センター、1998)に拠る。

A study of Dan Kazuo's "Fish climbing?tree" and "A Piedmongt Girl"
— related to hometown's symbo —

SHEN Fuzhen

In September 1937, Dan Kazuo's "Fish Climbing Tree" was published in the WASEDA Literature and then was reprinted in the Hekido zanka of Manshu? ro?man so?sho's?Spring works in May 1941.

After graduating from Tokyo Imperial University in 1936, Dan arrived in Manchuria under the guise of asking for a position in the Manshu? Railway. However, instead of working of that company, he went over to Dalian, Mukden, Hsinking, Harbin and so on and then returned to Japan directly in autumn.worte "Fish Climbing Tree" the following year of his fisrtvisita to Manchuria. He went to Manchuria for the third time after his marriage. After returning to his country, in June 1943 Dan pulished "A piedmonggt Ggir" in Literary Century, which was a sepuel to "Fish Climbing Tree"

When we talk about "Fish Climbing Tree" and "A piedmonggt Ggir", we should not ignore the relationship between Dan and Manchuria. At the beginning of "Fish Climbing Tree"it described the origini of the heroine named Aki and Mt Fuji. She grew up along with Fuji which appeared several times. Again, "A piedmonggt Ggir" also described Mt Fuji.

This paper will discuss a symbolic meaning of Mt Fuji and the Homeland problem focusing on "Fish Climbing Tree" and "A piedmonggt Ggir", considering Dna's experience in Manchuria.